長洲町立長洲小学校　校長便り　№43

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和4年10月24日(月)

20日（木）に3年振りとなる「長洲町小学生親睦陸上記録会」が実施されました。練習している子供達の姿を知っているので、当日競技場での真剣な姿に、少々涙腺が緩んでしまいました。私は大会を運営する側におりましたので、本部席から応援することが多かったのですが、それでも子供達の頑張る姿を写真に収めました。

子供達の姿を眺めながら改めて思ったことがあります。それは、「結果より過程が大切」だということです。子供達の心の中には自分との戦いがあったはずです。自分に打ち克つことが最も重要なことだと、改めて感じることができた会でした。

学校展望「感謝と挑戦」

コロナ禍の影響で、保護者の皆様や地域の皆様との交流が難しい状況が続いています。この状況を打破するための取組の一つとして「みんなの居場所」を執筆しているのですが、最近感想を頂くことが多くなりました。特に、「自分を語る」についてはお読み頂いている皆さんからの反響が大きいです。（本当は別の部分が大事なのですが…）私自身のことをできるだけ身近に感じて頂ければと思い、ついつい面白おかしく書いてしまい、紙面を占めるスペースも大きくなっています。病気やケガの件は最も読者が多いようですね。それでも、読んで頂けることに感謝です。

様々な場面で思うように活動や交流ができない状況の中、やっと熊本県のリスクレベルが1に下がり、活動の活性化に少しだけ期待してしまいます。予断を許さない状況であることは間違いありませんが、私の性格でしょうか、「コロナ禍だから何もできない。」ではなく「コロナ禍にできる何か」を探りたくなってきます。3密回避で考えるならば「屋内」の行事は難しい…。じゃ「屋外」でしょ。そんな風に単純に考えることが大切であるようにも感じます。屋外で心に残る、達成感のある行事はどのようなものがあるでしょうか?そんなことを考えると楽しくなってきます。

【雑感】相手の心を想像して

人付き合いというものはとても難しい。個人のパーソナリティがぶつかり合うことから軋轢が生じ、思わぬトラブルが発生するからだ。出来るならその様なトラブルは避けていきたい。では、そんな時、どうすればよいのだろう。一言で結論を出すならば「相手の気持ちを想像して言動を律すること」であろう。

個人は社会生活を送る中で、個別に与えられた仕事があるため、基本的にはそれを優先して行動する。しかし、企業や学校は組織として活動しているので、個人主義は軋轢の基となる。本来、個別の仕事であっても組織の中の幾つもの「個」が支え合って、個別の仕事が成り立っていくのであり、それを意識できる人が仕事を成功させ、成果を上げていくのだ。これまでの経験から、前述の個人主義が感じられる人は、自分自身の個人主義的な振る舞いに気が付いていないことが多い。この様な人は大抵、自分の頑張りが認められないと嘆き、成果が上がっていない事にも気が付かず、原因を自分以外に転嫁していくようである。相手の心に寄り添い、その人の立場で言動をコントロールすれば、その様なことは起こらないと思う。

「自己（国）中心」の風潮が世界的にはびこる中ではあるが、個人がすぐ隣の人の心を想像し、思いやりを持って接することが連鎖し、相手の心に寄り添うことがグローバルな流れになっていくことを願ってやまない。

シリーズ「自分を語る」＃43

嘉島西小2年目、5年生担任を仰せつかりました。初任者研修をまともに受けていない私はとにかく情報収集の毎日で、期待と不安が入り混じった毎日でした。その年の初任者と一緒に研修を受けさせて頂いたこともありました。なりふり構わずという言葉がぴったりの毎日です。「めあて学習?」「課題?」「主体的な学習?」訳の解らない言葉がたくさん出てきて、自分のレベルの低さに自尊感情もかなり低かったと記憶しています。「どうせ俺は…」とか「俺は入院していたから…」とか、色々な言い訳をして、自分を繕っていました。今考えると情けない状態がしばらく続いていたのでしょう。

そんな中にも、子供達はよく私について来てくれました。当時の子供達はよくこんな話をしていました。「澤田先生は怖いけど、おもしろい。」あるいは、「怖いけど、変。」私も怖いばかりでは面白くないだろうということで、頑張りを褒め、できたら楽しみの時間を提供し、次のステップへ進んでいく。そのステップはスモールステップの連続で、常に子供達が克服できる課題を連続させ、成功体験を連続させることにより、モチベーションアップを狙っていたのです。たまにはプライドを揺るがすような声掛けをし、更なるモチベーションアップを狙いました。これがまんまと成功し、多くのことに挑戦し、乗り越えていくことに喜びを感じる集団へと変貌していきました。そして、私が担任時代に続けていた一つの取り組みにたどり着きます。

嘉島西小学校での1年目に感じたことがあります。私だから感じることだったのかもしれません。それは、子供達の「やる気の低さ」でした。黒石原での「生きる」ことに必死な子供達を見てきているので、児童のそのような実態が私の目には異常に見えたのです。1年目は特別支援学級の立ち上げに専念しながらも、交流学級の子供達と何かできないかと常に考えていました。ただ、何かをしようといっても、経済的にも余裕がありませんでしたし、ぼんやり考えていたのが、きつさや辛さの克服を伴う長い遠足でした。

1年目の夏休み、早朝から正午にかけて、少し長めの遠足を企画し、保護者の皆さんと協力して、12㎞の遠足をしました。夏でしたので、「涼しさを感じよう」という視点でコースを考えたところ、熊本空港から西原村の「白糸の滝」を経由し、河原小学校までのコースを歩きました。当時この計画を保護者に提案したところ、「なぜ、夏の暑い時期に12㎞なの?」とか「無謀ではないか?」とか「なぜそんなきついことをわざわざ…?」というような意見が多数聞かれました。若かった私は「それもそうだなぁ。」と思いつつ、それでも「何かしなければ。」という気持ちと、「希望者の参加ですから。」と保護者にご理解を求め、実施しました。計画段階では校長先生もかなり心配されましたが、OKを頂きました。改めて考えてみると、この時の自分の熱量は大したものだと思います。新しい事への挑戦は莫大なエネルギーを費やすと共にストレスも感じますし、それを跳ね返すことも必要ですからね。

（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）